

学位論文題名

社会恐怖 (社会不安障害) 患者の人格特性、 養育環境および臨床症状評価尺度に関する検討

学位論文内容の要旨

対人関係を主体とした社会的状況において著しい恐怖感、不安感が生じ、日常生活が障害されるという社会恐怖 (社会不安障害) については、1980年に米国精神医学会における精神疾患の診断と統計のためのマニュアル第III版 (DSM-III) においてその診断基準が示されて以降、欧米では多くの研究がおこなわれるようになってきている。また、この病態について、薬物療法や精神療法に対する治療反応性の研究もおこなわれるようになり、臨床症状の評価尺度も開発されている。

一般に、精神疾患の発症要因や治癒機転に関して、人格特性の影響を考慮することは重要であり、これは社会恐怖についても同様と考えられる。近年、人格をいくつかの次元に分割し、各次元の傾向の強弱を測定する次元論的人格評価尺度が临床上使用されることが多くなってきており、その中で、Cloningerら¹⁾が開発したTemperament and Character Inventory (TCI) は、人格の生理学的背景を基盤にした人格理論を基にしており、注目されるものの一つである。また、精神医学領域では環境要因として人生早期に親から受けた養育の経験が、青年期、成人期以降における人格の形成や精神症状の発症との関連で研究がなされ、養育環境の評価尺度についても検討されてきた。近年になり、Parkerら²⁾は多くの親の養育態度と行動の研究から、因子分析的手法を用いて養護と干渉という二因子を抽出し、Parental Bonding Instrument (PBI) を開発した。今日、PBIは世界的に頻用される親子関係の指標として、さまざまな精神疾患の発症要因あるいは治療反応性についての研究に使用されている。精神疾患については、遺伝学的な素因も含め生物学的背景を基盤に、さまざまな社会文化的背景の影響を受けて発症すると考えられるが、わが国でも国際比較可能な指標を基に評価してみる必要があると考えられる。社会恐怖については、その臨床症状や治療反応性についての評価に欧米ではLiebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) が多く使用されている³⁾。今後、精神疾患の国際比較の観点からもわが国の症例においても国際的に使用されている操作的な診断基準を用い、諸外国の症例と比較可能な評価尺度を使用して検討してみる必要性があると考えられる。

本研究では、まず精神疾患の既往のない健常成人において人格検査としてTCIと養育環境の検査としてPBIを施行し、人格特性と親の養育態度の関係を検討した。続いて、TCIとPBIを使用し、社会恐怖患者と健常成人においての人格特性と親の養育態度の比較を行った。さらに、今後、この疾患について国際比較を可能にすることを目的に社会恐怖の臨床

症状評価尺度として欧米で使用されることが多いLSASの日本語版 (LSAS-J) を作成し、その信頼性と妥当性の検討をおこなった。

健常成人における人格特性と親の養育態度の検討では、精神疾患の既往のない企業就労者59例、平均年齢 32.1 ± 7.6 (mean \pm S.D.) 歳 (男性31例、女性28例) を対象として検討をおこなった。TCIでは、男性、女性とも気質因子である損害回避 (HA) と性格因子である自己志向 (SD) とが負の相関を示し、気質因子である報酬依存 (RD) と性格因子である協調 (C) が正の相関を示した。PBIでは、男性では父親の養護と母親の養護に正の相関がみられた。女性では父親の養護と父親の干渉に負の相関がみられ、父親の養護と母親の養護に正の相関がみられた。また、父親の干渉と母親の干渉に正の相関がみられ、母親の養護と母親の干渉に負の相関がみられた。TCIとPBIの関係では、男性では自己志向 (SD) と父親の干渉に負の相関がみられ、協調 (C) と母親の養護に正の相関がみられた。女性では報酬依存 (RD) と母親の養護に正の相関が、自己志向 (SD) と母親の干渉に負の相関がみられた。

社会恐怖患者と健常成人においての人格特性と親の養育態度の比較検討では、疾患群として米国精神医学会における精神疾患の診断と統計のためのマニュアル第IV版 (DSM-IV) の診断基準を使用し、社会恐怖全般性と診断された外来患者37例、平均年齢 26.3 ± 8.8 (mean \pm S.D.) 歳 (男性21例、女性16例) を対象とし、健常群として疾患群に年齢がほぼ近似するように抽出し、性別をマッチングした37例、平均年齢 28.5 ± 5.1 (mean \pm S.D.) 歳 (男性21例、女性16例) を対象として検討をおこなった。TCIにおける比較では、疾患群で気質因子である損害回避 (HA) が高く、性格因子である自己志向 (SD) が低いことが特徴的であった。PBIにおける比較では、疾患群において父親の養護が低く、母親の養護が低いことが示された。

社会恐怖の臨床症状評価尺度の検討では、欧米で使用されることが多いLiebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) の日本語版 (LSAS-J) を再翻訳の手続きを経て作成し、DSM-IVの診断基準を使用し、社会恐怖全般性と診断された外来患者30例、平均年齢 28.0 ± 12.6 (mean \pm S.D.) 歳 (男17例、女性13例) を疾患群とし、疾患群に年齢、性別がほぼ近似するように抽出した健常成人60例、平均年齢 32.2 ± 7.6 (mean \pm S.D.) 歳 (男性31例、女性29例) を健常群として、その信頼性と妥当性の検討をおこなった。疾患群におけるLSAS-JのCronbachの α 係数は全項目で0.95を示し、下位評価項目においても0.80から0.91を示し、内的整合性は保たれていると考えられた。健常群において2回施行したLSAS-Jにおける級内相関係数 (ICC) は全項目で0.92であり、下位評価項目においても0.86から0.92を示し、再テスト信頼性は高いと考えられた。疾患群におけるLSAS-Jと社会不安の評価に使用されている自己記入式の評価尺度で、すでに日本語版の信頼性と妥当性が確認されているSocial Avoidance and Distress Scale日本語版 (SADS-J) については全項目および下位評価項目においても相関を示した。さらに、LSAS-JとSADS-Jは医師が判定した重症度とも相関を示した。また、疾患群のLSAS-Jの全項目得点と健常群のLSAS-J全項目得点においてROC曲線を作成しカットオフ値を求めると42点 (感度86.7%、特異度86.7%) であった。これらのことより、LSAS-Jは、わが国において社会恐怖の臨床症状評価尺度として使用可能と考えられた。

今後、さらに分子生物学的手法を用いた遺伝学的要因や機能画像を用いた治療反応性に

対応した脳機能の変化の研究が進展すれば、本研究の結果と合わせて、社会恐怖において、遺伝、環境、人格特性から発症に至る過程、さらに治療によりそれらがどう関連して改善しあるいは改善しない因子が残るか検討していくことが可能になると考えられる。

- 1) Cloninger CR et al (1993) Arch Gen Psychiatry 50: 975-990.
- 2) Parker G et al (1979) Br J Medical Psychology 52 : 1-10.
- 3) Liebowitz MR (1987) Mod Probl Pharmacopsychiat 22 : 141-173.

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 小 山 司

副 査 教 授 岸 玲 子

副 査 教 授 寺 沢 浩 一

学 位 論 文 題 名

社会恐怖（社会不安障害）患者の人格特性、 養育環境および臨床症状評価尺度に関する検討

社会恐怖（社会不安障害）については、1980年に米国精神医学会における精神疾患の診断と統計のためのマニュアル第III版においてその診断基準が示されて以降、欧米では多くの研究がおこなわれるようになってきている。しかし、この疾患に関しての次元論的人格特性についての検討は少なく、養育環境についてはほとんど検討されていない。さらに、わが国では臨床症状の評価尺度は確立していない。本研究では、次元論的人格検査として Temperament and Character Inventory (TCI) を使用し、養育環境としての両親の養育態度を Parental Bonding Instrument (PBI) を使用して健常成人および社会恐怖患者の人格特性と両親の養育態度について検討した。さらに、この疾患について国際比較を可能にすることを目的に、欧米で臨床症状の評価尺度として使用されることの多い Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) の日本語版 (LSAS-J) を再翻訳の手続きを経て作成し、その信頼性と妥当性の検討をおこなった。

健常成人における人格特性と親の養育態度の検討では、TCI では、男性、女性とも気質因子である損害回避と性格因子である自己志向とが負の相関を示し、気質因子である報酬依存と性格因子である協調が正の相関を示した。TCI と PBI の関係では、男性では自己志向と父親の干渉得点に負の相関がみられ、協調と母親の養護得点に正の相関がみられた。女性では報酬依存と母親の養護得点に正の相関が、自己志向と母親の干渉得点に負の相関がみられた。社会恐怖患者と健常成人における人格特性と親の養育態度の比較検討では、TCI における比較では、社会恐怖患者で気質因子である損害回避が高く、性格因子である自己志向が低いことが特徴的であった。PBI における比較では、社会恐怖患者で父親の養護得点が低く、母親の養護得点が低いことが示された。社会恐怖の臨床症状評価尺度の検討では、LSAS-J の Cronbach の α 係数は全項目で 0.95 を示し、内的整合性は保たれていると考えられた。2 週間の間隔をおいて 2 回施行した LSAS-J における級内相関係数は全項目で 0.92 であり、再テス

ト信頼性は高いと考えられた。LSAS-J と社会不安の評価に使用されている自己記入式の評価尺度で、すでに日本語版の信頼性と妥当性が確認されている Social Avoidance and Distress Scale 日本語版 (SADS-J) については全項目および下位評価項目においても相関を示した。さらに、LSAS-J と SADS-J は医師が判定した重症度とも相関を示した。また、社会恐怖患者の LSAS-J の全項目得点と健常成人の LSAS-J 全項目得点において ROC 曲線からカットオフ値を求めると 42 点 (感度 86.7%、特異度 86.7%) であった。これらのことより、LSAS-J は、わが国において社会恐怖の臨床症状評価尺度として使用可能と考えられた。

質疑応答では、岸教授から、両親の養育態度の評価と評価時の年齢についておよび男女差について、社会恐怖患者の遺伝的側面について、国際比較する場合の社会文化的背景の違いによって生じる要因についての質問があった。これに対して申請者は、両親の養育態度の評価と評価時の年齢について相関はみられなかったこと、特に女性においては父親、母親ともに養護得点と干渉得点が負の相関を示したことにより情緒的交流に欠ける対応は過干渉な対応につながりやすい可能性があること、全般性社会恐怖患者の第 1 度親族における全般性社会恐怖の頻度は健常者の約 10 倍になるという報告もあることから遺伝的要因の関与も想定されること、自己臭恐怖や自己視線恐怖、醜形恐怖などの確信型対人恐怖に分類される群についてはわが国以外からの報告が少ないこともあり社会文化的影響が大きい可能性はあるが、社会恐怖については今回の臨床症状評価尺度の検討の結果から LSAS-J を使用して国際比較することは可能であると考えられることを回答した。次いで寺沢教授から、LSAS-J の評価方法について、LSAS-J の評価で行為状況と社交状況に分けて評価している理由に関して質問があった。これに対して申請者は、評価者は LSAS-J の評価項目の意味する状況を考慮して質問する必要があること、社会恐怖の研究で行為状況のみならず社交状況においても恐怖感を呈することが明らかとなってきたため、LSAS-J では両状況を評価するように作成されていることを回答した。

この論文は、社会恐怖患者における次元論的な人格特性として気質因子である損害回避が高く、性格因子である自己志向が低いという特徴を示し、両親の養育態度では両親の養護が低いことを示し、さらに臨床症状の評価尺度として LSAS-J を確立したことにより国際比較を可能にした、という点で高く評価される。今後、分子生物学的手法を用いた遺伝学的要因や機能画像を用いた治療反応性に対応した脳機能の変化の研究が進展すれば、社会恐怖において、遺伝、環境、人格特性から発症に至る過程、さらに治療によりそれらがどう関連して変化するか検討していくことが可能になると期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、申請者が博士 (医学) の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。